



天皇杯に輝く名茶 そのぎ茶

～その歩みをたずねて～

東彼杵町史談会会員 谷山 満三郎

9. 上彼杵原頭に立つ (1)

中山、中尾、太ノ原、太ノ浦など、長崎県と佐賀県の境界には、なだらかな地形が広がる。その小さな盆地に伝来の茶園が集園しながら営まれている。

中尾集落の背後は、かつて林地崩壊予防事業で固められ、山崩れを^{しつか}確り防護してある。

中尾東から東の方向県境に副って台地が続き、さらに太ノ原集落の周囲に可成の集団茶園があり、この一帯が「そのぎ茶」の主産地の一つとなっている。

この地帯はかつては、国有林野が多くまた町有林野も広がった。戦前は軍用馬の飼糧^{まぐさ}を作ったり畠の周囲に茶を育て、自家で茶を摘み・煎るなど手を加えて飲茶^{のみちや}をつくり、各人それぞれ縁故^{えんこ}をたどり知人を訪ねて販売し、生計をたてていた時代が長かった。明治中期、かつて大村藩医であった中尾松涛^{しょうとう}氏とその息子方一^{ほういち}氏の尽力が実り衆議院議員島津良知^{よしとも}氏の支援があつて、明治44年上彼杵産業組合を設立し、大正15年・昭和3年県下に先駆けて共同製茶工場を設置してきたが、さきの大戦中は、食糧増産優先の政策から茶園が食糧畠に替わったところも多く、終戦当時茶の生産力は極端に低下していた。

昭和20年8月15日無条件降伏した我が国の食糧は極端に^{きゅうはく}窮迫して、ほとんど飢餓状態にあつたとき、連合軍は、この飢餓に瀕した我が国の食糧事情を緩和するため、主要食糧の放出をおこなったが、その見返り物資として日本政府に対し昭和20年10月、茶、その他を指定してきた。茶は生糸とともに国民期待のうちに、はるばる太平洋を渡ってアメリカへ輸出されたのであつた。県茶業所、彼杵農協茶工場ともフル操業して輸出茶を生産し、戦後の貴重な外貨獲得のため「そのぎ茶」が大きく貢献したのであつた。

資料不足ではあるが、昭和21年12月某日、年は迫り折から寒天の中を当時彼杵町議会勸業委員長の自宅を訪問した数名があつた。

上彼杵地区の有力者町議大山米作氏、郷総代尾上道次郎氏、実行組合長と称する中山周雄^{ちかお}氏、町議・農協理事林原道太郎氏であつた。



払い下げられ成園した上彼杵茶園の一部

先ず大山町議は「上彼杵地域農家の生計向上をはかるには、この地域にある営林署の原野、町有原野 80 余町歩を活用し、幸い茶が好況であるので茶園の拡大を図りたい。」(大山氏は営林署・町有林野監守委員でもあった)。

郷総代尾上道次郎氏は「上彼杵は水田に乏しく復興工事の出稼ぎにしてもあまりにも遠隔で出て行けない。やはりこの地域で生産をあげ生計をたてる他はない。そこで馬草も不用となった今日、この林野を利用させてもらう方法はないものか。」

中山実行組合長は「この地域の青年は、時代はさらに大きく変わるであろうし、景気・不景気もあるだろう此処での確りした生活基盤を創らねばならない。そのためには眼の前の林野の活用こそ生きる道が開けるものだと青壮年は集まる毎に議論している。」



太ノ原の高原に広がる茶畑でのひととき

林原議員は「上彼杵の現況は、ただ今皆が申しましたとおり、委員長はもとよりよくご存じのとおりですが、農協の立場から申しますと、幸い長い茶づくりの歴史があり平地に乏しいこの地域のこれからの生計の道は質のよい茶を生産販売することにつきると思いますので、茶の品質を均一にする確かな売先を確保することが先決と考えますが、それにしても、ある程度の量が^{まと}纏まらなければなりませんので、上彼杵一帯の茶園拡大に是非大きな力をいただきたいと思ひまして、こうして揃ってお願いに上がりました。」

勸業委員長は「お話はよく判りました。林野管理については、私も責任があり、大山さんと話し合いながら林野 80 町歩だけでなく、彼杵町 300 町歩の活用を計りたい。そのための努力を致します。」と確と返答した。

遠来の客をもてなす準備もできずあり合わせのソーメン、くじらで体力を温めてもらい、折から降り出した小雪まじりの夜道を帰られたが、大山尾上お二人はお泊りで深夜までさらに熱心な話が囲炉裏端で絶えなかった思い出がある。

翌日、役場から帰って「岩永藤樹町長はよく判ってくれた。早速調査に取掛る」と言ってくれたと満悦した顔であった。

役場日誌には、昭和 22 年 2 月 7 日、前日に引続き町有林野調査のため森(浅一)書記現場出張と記されている。

このことから考察すると、町有林地の払下げの議案は昭和 22 年度末までに議決され、払下げが実現したのではなかろうか。

町有林野の払下げは、現在のそのぎ茶の生産基盤拡大に大きな功績を残しているのではなかろうか。

以下次号